

今日は掲載地図の①テシ(tes 岩梁)と、その前後の二つのアイヌ語地名を解釈し、次回はカムイコタンの最後のハルシナイで、カムイコタンの結びとしたい。

まず、テシの下流にあるサヌシピリであるが、以下は安政四年(一八五七年)にカムイコタンを調査した松浦武四郎の「再窓石狩日誌」の記述である。

「サヌシヒリー此處両岸差出たり。其

間十丈三間(約二十一尺~二十三尺)獅子吼とも云處なるべし。サヌシは両岸え木をわたし、其上に居て魚を捕ることを云也。サヌは橋の様成るもの也。ビリは水の渦まく事を云也。此下、水渦をなすが故に云也。」

武四郎の記録から、「サヌシヒリー(san-us-piri 棚・にくつついでいる。渦)——棚の下の渦巻き」と読める。掲載

図①の「テツシ」の中央が、テシサン(tes-san 梁・台=棚)で、この台の

代わりに木が渡してあり、その下が渦が巻いていて、ここでヤ(ya 網)か、アブ(ap 流し鉤)で魚を捕る場所である。他方、松浦武四郎がテシの上流にあらというルイカウンについては、次のように書いてている。

「ルイカウシ——右の方大岩の上をこゆる故云。此辺木賊多し。こへて少し平地が有る処え出たり」(同前)

ところが、翌安政五年(一八五八年)に、松浦武四郎は十勝越えの際に再びカムイコタンを通過する。この時は、「ルイカは橋、ウシは有ると云こと也。此処昔神が橋を架んとして両方より大岩をつき出したる処と云り。」(「東部登加智留字知之誌」と、「ルイカウシ

このテシの下流と上流の二つのアイヌ語地名については、明治の永田方正も、昭和の知里真志保も全く触れていない。明治二十年代には、既にこのように伝承が途絶えていたのであろうか。なお、実際に相当現地調査をしたが、この二カ所の場所の特定は出来なかつた。

さて、当連載の⑥で、既に松浦武四郎のテシに関する記述を紹介した。このテシは、ニッネカムイとサマイクルカムイの鬭争伝説の発端であった。ところが、松浦武四郎は、このテシでは、このことに一切触れていない。

これは、当連載の⑥のトゥレプサラニープ(turep-saranip オオウバユリの球根)を入れた「手さげ籠」の項目で、松浦武四郎が、「惣て此鬼神には種の縁故もありしが、アイヌ等他に語ることを禁ぜりとかや。」(『石狩日誌』)と述べているように、当時の道案内のアイヌの人たちは、伝説の発端だけは、松浦武四郎には語らなかつたためと思われる。

それ故、松浦武四郎は、「テツシと云は魚を留る具也。其が岩にて出来たりと云事也。其間大滝に成たり。しばし佇立して魚類の飛上るを見るに如何にも見事也。」(「再窓石狩日誌」と記述、武四郎が持参した野帳(フィールドノート)の『日第二番』でも、同じ内容が簡潔に記され、掲載図①の「テツシ」の図と、もう一枚は鮭をテシで誘導してアブ(ap 流し鉤)で鮭を捕る絵が描かれている。あくまでも、テシの説明に終始している。

なお、先の文に見えた「その間大滝に成りたり」の武四郎の野帳のスケッチ

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

(71)

高橋 基



①『日第二番』—「テツシ」



②「テシホ」



③テシ全景



—旭川のカムイコタン②—

が、掲載図②の「テシホ」で、掲載写真③は、武四郎と同じ左岸の川岸から撮影したテシ全景である。逆巻く怒濤と轟音は、空知川、夕張川も同じで、カムイコタン(神の・居所)の尊称が実感できる絶景である。(アイヌ語地名研究会幹事)